

今年はお出雲大社でも60年ぶりの遷宮が行われ、遷宮ブームが続いている。しかし意外にも、定期的に社殿を建て替え新しい社殿に神様を移す意味や由来については殆ど不明だ。職人の建築技術の伝承、木造建築の耐用年数など諸説あるものの、それらは日本書紀などと同様“後付け”と考えられている。なぜなら技術の継承に建て替えが必用なわけじゃないし、木造建築でも100年以上は持つからだ。そもそも神道自体に教義や教典が存在しないので無理もない。あえて言えば「新しく生まれ変わる思想」、エネルギー再充電のようなものらしい。そう言えば日本人は正月や初物、入学式や“心機一転”が大好きだ。いっぽう世界に目を向けても遷宮のような文化や行事はないらしく、謎はますます深まるばかり。

しかし実はこれに良く似た行事や内容が聖書に数多く書かれていることをクリスチャンなら誰でも知っている。ユダヤ人の祖先である古代イスラエル人はかつて3500年前頃、エジプトから砂漠を移動中に神託により移動式の宮である「幕屋」を造り、長年にわたって場所から場所へと移動する度に繰り返しそれを分解し組み直して礼拝した。当時の技術を結集した匠の技から生まれた調度品と、その使用法や寸法などの規約や、“宮司”である大祭司をはじめ祭儀に携わる人々がすべて世襲制であることなど類似点があまりに多いので、著名ユダヤ人のヨセフ・アイデルバーグやM・トケイヤーらが日本に滞在した際に驚いたことは有名だ。

だが決定的な違いがある。それは“ご神体”がないことである。全宇宙を創造した全能者である神がその様な小さな場所に入るわけがない。そこはあくまでも“神との会見”の場所であり、人間が面倒見ないとやっていけない類ではない。この500年後に豪華な神殿を建て遷宮をし直したソロモン王は、

「神は果たして地の上に住まわれるでしょうか。天も、天の天も、あなたをお入れすることは出来ません。まして、私の建てたこの宮など、なおさらのことです。」 1列王記 8章 27節

と神に向かって告白している。さらにその1000年後には、ご神体であるキリストが地上にやって来て十字架で人類の罪の贖いを成し遂げ天に帰ったが、今度は天よりキリストを信じる人々に聖霊を遷宮して下さった。

「あなたがたの体は、あなた方のうちに住まれる、神から受けた聖霊の宮である。」

1コリント人への手紙 6章 19節

と聖書の示すとおり、信じる者にはすでに神が心に宿っており、パワースポットなどは不要なのである。今こそ神を心に遷宮して祝福を受けよう。

2013-10-13



写真1：幕屋模型



写真2：明治時代の出雲大社